特集
ことば

MESSAGE ひらけ！

国語のチカラを鍛えれば、人は、自分という小さな枠組みを打ち破って「外へ！」行ける。「自由」になれる！

にもかかわらず国語は誤解される、とくに読解問題。テレビで有名な作家が「人物の心情なんて、私の答案は全部バツでした」と面白おかしく話すから、「学校国語は自由な読みを育てない、画一教育だ」と批判する人までいる。

文章は自由に読んではいけない。例えば、命に関わる新薬の説明文章、100人が自由に読んで100通りに受け取ったらどうなる？　社会は大混乱だ。100人がブレずに1つの意味を読み取って、その上で、新薬を使う使わないなど100人それぞれの意見を持つなら自由だ。これは薬の説明に限ったことではない。小説にしろ随筆にしろ、読解するのは「他者」が書いた文章。他者には他者の考えがあり想いがある。そこに辿り着くにはスキルが要る。

インターネットに文章があふれかえる今、「自分という狭い枠組みから1歩も出ない読み」をしている人がいる。狭い自分の興味だけで待ち伏せし、そこに都合のいい箇所だけを、都合よく解釈して取り込む。面倒な箇所はスルーしてしまう。「文章全体で筆者が伝えたいこと」なんか、はなからおかまいなし。自由に読んだ慣れの果ては、どこまで行っても「自己投影」、そこには「自分」しかいない。

「自由に読んで、自由に考える」と「正しく読んで、自由に考える」とは大違いだ。

100人が1つの意味を読み取れるようにするのが「国語」。正しく読んだ上で、100人それぞれが、自分の頭で考え、自分の意見を表現できるようにするのが「小論文」。高校生を対象に、理解中心の国語教育も、アウトプット中心の小論文教育も、両方やってきた私だから言える、

「他者の中へ行く！」これこそ国語の醍醐味だ。

私がこの醍醐味を思い知ったのは、国語編集者から小論文編集長に登用された時だった。

長い難解な文章を読まなければならないことに疲弊した。小論文は入試も資料も解説も、大学教授など研究者が書いたものが多く、科学・法学・経済学など専門性も強い。

その日、私は、超高難度の超長文を何度読んでも途中でついていけなくなっていた。仕事は鬼のようにあり、時間だけがどんどん過ぎる。「もうダメだ」と諦めかけた時、国語編集者時代に身につけたこのことを思い出した。

「国語にはルールがある。“しかし”の後は必ず逆説。“父もそう言った”と“も”があれば、父以外の誰かもそう言っている。そういうルールにひたすら忠実に、自分の思い込みを排して読んでいけば、筆者の中へ行ける！」

私は自分の思い込みやイメージを混ぜず、ひたすらルールに忠実に読んでいった。1段落読んでは自分の言葉で極力短く「要約」し、また1段落読んでは要約…。これを粘り強く最後までやり通した。

次に、要約だけを最初から通して読んでみる。すると、まるでレントゲンを撮るように、筆者の「文章構成」が見える！　そうか！　研究者の論理構成は複雑で、論理の息が長い。しかも私とは全然違う「手続き」でものを考えている。難しい原因はそこだったんだ！

論理構成＝「文章の地図」が頭に入って、もう一度、元の文章を最初から読んでいくと、今度は、わかるわかる！

最後まで読み切ったとき、私は、自分という狭い枠組みを打ち破って「外へ！」行けた。その瞬間、とうてい辿り着けないと諦めかけていた「未知」に、触れた。

「ひらけ」が来た！

「自由に読ませてもらえない」、だから国語は素晴らしい。「社会に通用する言葉のチカラ」を鍛錬させてもらえる。

国語で身につく言葉のルールは普遍的。社会に通用するどころか日本語のわかる世界中の人に通用する。50年も100年も生きる。

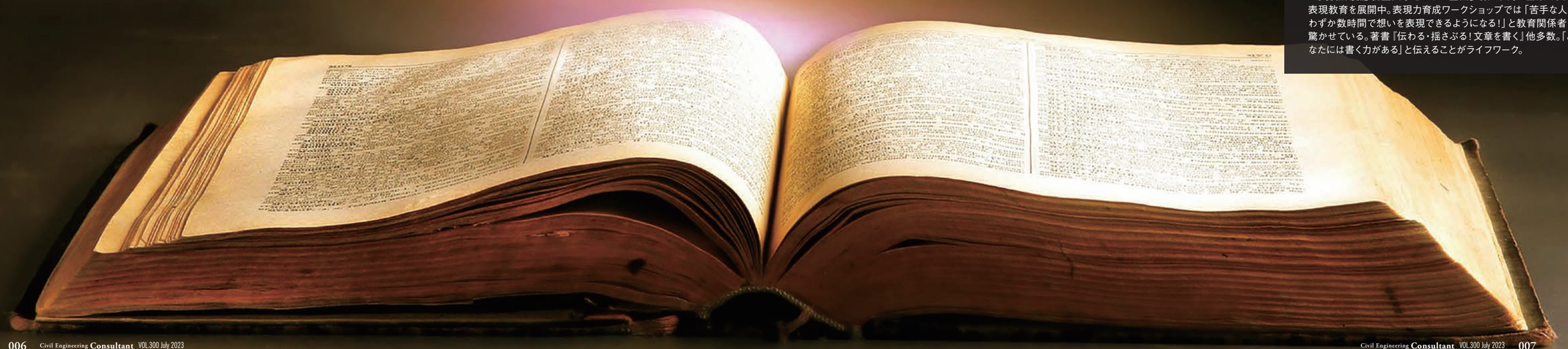
このルールに忠実に文章を読めば、100年前に死んだ作家の生き生きした想いに触れられる。今を時めく天才の頭の中へ行ける。人生の壁にぶち当たった時、既にその壁をのりこえた人の叡智に辿り着ける！

国語で培った普遍的ルールや、言いたいことを読者に効果的に伝える文章構成を駆使すれば、自分の想いを世界に発信することができる。100年後の人にバトンを渡すこともできる。時空を超えてコミュニケーションできる。

「自由」だ！

読解に赤を入れられる時、そこが自分と世界の境界線だ。自分の言葉力は社会に通用するレベルへと引き上げられている。そこで自分のイメージにしがみつくな、自分の殻に引きこもるな。

「ひらけ！」

山田 ズーニー
YAMADA Zoonie

プロフィール
文章表現教育者・作家。Benesse国語編集者を経て小論文編集長として高校生の考える力・書く力を育成。2000年フリーランスに。現在、慶應義塾大学をはじめ全国多数の大学・企業で文章表現教育を展開中。表現力育成ワークショップでは「苦手な人もわずか数時間で想いを表現できるようになる！」と教育関係者を驚かせている。著書『伝わる・揺さぶる！文章を書く』他多数。「あなたには書く力がある」と伝えることがライフワーク。